

# 本を選ぶ

NO.437 2021年(令和3年)10月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

- <ろん・ぼわん> 10年後の「本のある場所」のいま
- 「銀座百点」800号の歩み
- 学校図書館とつながってください!
- 彩り・・・脳性麻痺・・・
- 鳥の目 86

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## 10年後の「本のある場所」のいま

●丹治 史彦●

2011年の震災直後に始動した〈一箱本送り隊〉の活動から展開し13年7月、石巻の中心市街地に〈石巻まちの本棚〉を開設した。内装はインテリア建築関係の雑誌数誌の協力で提供いただいた部材を石巻のみなさんとセルフビルド、左官職人の挟土秀平さんを講師にワークショップで壁面に漆喰を塗り、全国の〈一箱古本市〉関係者に声をかけて集まった1000冊ほどの本を納めた。その後も〈いしのまき本の教室〉など本を書く人、作る人、売る人たちの話を聞く会を企画している。2015年5月の第1回は「ブックカフェのはじめかた」として仙台で古書店+カフェ〈火星の庭〉を営む前野久美子さんを講師に迎えた。20組を超える参加者が集まったことも驚きだったが、前野さんの熱い講義に答えるように質疑応答も白熱し、その後この講座から4軒ものブックカフェが誕生したことは特筆すべきことだろう。

〈まちの本棚〉の活動を足掛かりに、〈一箱本送り隊〉のメンバーは東北沿岸部の「本のある場所」との交流を重ねてきた。昨年晩秋、震災からの10年を自分たちなりにまとめる時期ではないかと話し合い、本とコミックの情報誌〈ダ・ヴィンチ〉に10年後の「本のある場所」をめぐる企画を持ち

かけた。幸い快諾いただきライターの南陀楼綾繁さんと私は3月にのべ11日にわたる取材を敢行、福島、宮城、岩手の書店、古書店、図書館、出版社、アーカイブなど25カ所を訪ねた。

津波で店舗を流された方、避難所として店に地域の人を受け入れた人、隣県に避難しながらも出版を止めなかった版元、当時東松島市図書館副館長だった加藤孔敬さんの言葉が忘れられない。

「避難所での読書は、自分だけの世界にいられる切実なものでした。でも、本を読まない自由もあります。一方的に読書を押し付けることはしてはいけません。すべてを失っても、自由は手放せないものだからです」(「ダ・ヴィンチ」2021年6月号)

震災の記録活動から新たな表現を模索する〈せんだいメディアテーク〉や〈20世紀アーカイブ仙台〉の動きも印象的だった。記録し公開し続けることは記憶の風化に抗うことにつながる。震災の記録がいつか「郷土史の一部になる」という認識。さらには「経験したか否か」という分断を越えて、震災の経験が「民話として共有されていく未来」までも見ずえる小森はるかさんと瀬尾夏美さんの表現活動。津波という体験を「共有」した松島湾を囲む市町村の有志が行政区を越えて新たな湾の価値を見出してゆこうとする〈つながる湾プロジェクト〉の試み……それぞれの10年があり、それぞれの思い、それぞれの試行錯誤とその先を見はるかす視線があった。

〈一箱本送り隊〉はこの先もこうした「本のある場所」に伴走しつづけたいと考えている。

(たんじ ふみひこ：信陽堂)

# 「銀座百点」800号の歩み

田辺 夕子

銀座は不思議な街です。

歴史が古いわけでもなく、巨大な商業施設もなく、風光明媚な自然や名所名跡もありません。それなのに、この街の名はいつも特別なあこがれを持って語られてきました。

縁あって銀座を冠するタウン誌「銀座百点」の編集部に入社して十数年が経ち、この街を知るほど、ほのかなあこがれは愛着へと変わりました。毎月のネタ探しや企画に苦しみながらも、この街の魅力をたくさんの人に知ってもらうために銀座八丁を歩いています。

「銀座百点」が創刊されたのは、1955年でした。昭和29年、戦後復興から高度成長期へ日本全体が勢いづくいっぽうで、銀座の商人たちは悩んでいました。巨大なターミナルデパートを要し、利便性の高い新宿や渋谷などの繁華街とくらべ、個人商店や専門店が点在している銀座の客足は減少傾向にあったからです。

そこで、商人たちは銀座のプロモーションのために話し合いを持ち、百軒の店が共同で出資し、銀座の香りや文化を伝える雑誌を創刊することにしたのです。誌面編集のノウハウは文藝春秋に、印刷は大日本印刷に、当時銀座に本社を構えていた両社と提携しました。こうして、昭和30年の1月に小誌は産声を上げました。「銀座百点」という冊子名は、当時文藝春秋の社長であった佐佐木茂索氏の命名です。銀座の百の店がつくる、百点満点の誌面を目指す——そういう意味合いが込められていたのです。

タウン誌とはいえ、文藝春秋との縁から文芸の面を、そして歌舞伎座や新橋演舞場という劇場を擁する「芝居町」ならではの芸能の面、この二つの軸を創刊時から大切にしています。さらに銀座百点会の会員店をはじめ、銀座の品や味の紹介も充実させ、情報だけではなく、読みごたえもある誌面制作という方向性は、今まで変わっていません。

800号の歴史の中でも、特に評判となった連載に

向田邦子さんの「父の詫び状」があります。『時間ですよ』や『寺内貫太郎一家』など、大ヒットドラマの脚本家として活躍していた向田さんに、「銀座百点」でのエッセイ執筆をすすめたのは文藝春秋社の編集者でした。幼いころからの家族の情景をつづった連載は1976年に開始、するとたちまち評判を得て、エッセイや小説の才能が開花しました。今年には向田さんの没後40年にあたり、さまざまなメディアでその魅力が再評価されています。

80年代には、時代小説家池波正太郎さんの『銀座日記』が評判をとりました。その小説とは異なり、洋食や洋画が大好きだった池波さんは、当時銀座にたくさんあった配給会社の試写室へよく出かけていました。その行き帰りに寄った

銀座の店を温かく、ときに厳しく活写したエッセイは好評を博し、続編も含め忙くなる年まで連載は続きました。今読み返してみても、池波さんにとって銀座は元気の源だったのだと感じます。

90年以降も、「文芸と芸能」という二つの軸は変わっていません。和田誠さんの『銀座界限ドキドキの日々』、内館牧子さんの『きょうもいい塩梅』、嵐山光三郎さんの『ギンザ散歩』、村松友視さんの『銀座の喫茶店ものがたり』、池部良さんの『銀座八丁思い出草紙』、坂木司さんの『おやつが好き』——そして今年7月号では、通巻800号の記念として、片岡仁左衛門丈・坂東玉三郎丈の特別対談や銀座の未来に関わるキーパーソンの座談会を掲載しました。

“銀座”という舞台の上で、のびやかに楽しく、街を歩くように筆を運んでほしいと思いながら企画や提案をする中で、さまざまな個性を持つ物語や企画が誕生することは、わたしたちの誇りです。これからも、無数の物語を紡ぐ銀座を紙の上につくり、届けていきたいと願っています。

(たなべ ゆうこ：銀座百点編集部)



# 学校図書館とつながってください！

木下 通子

埼玉県立浦和第一女子高校で、司書をしている木下通子です。11月にオンラインで行われる「図書館総合展」で、学校図書館関連イベントをいくつか担当させていただきます。公共図書館や大学図書館のみなさまにも、学校図書館の様子を知っていただきたいと思い、紙面をお借りしてご紹介させていただきます。

まず、ご視聴いただきたいのが、11月3日（水）に行われる「みちねこチャンネル！」です。こちらは、図書館総合展の学校図書館イベントを一気に紹介する番組です。学校図書館に興味はあるけれど、どこに参加したらいいかわからないという方は、ぜひ、こちらののをぞいでください。

同日、15：00からは新書「点検読書」のオンラインワークショップを行います。こちらは学校司書向けの講座です。高校生の読書離れが叫ばれる昨今、学校で本の読み方を教える時代がやってきました。探究活動ではいろいろな本を活用しますが、その時に本が選べない生徒が多いのです。スマートフォンひとつでなんでも検索できる時代になり、本に「はじめに」があって、「目次」があって、「あとがき」があることを知らない生徒もいます。また、参考文献を書く際に「奥付」の見方がわからない。著者の欄に出版社の社長の名前を書いてしまうという事例も、笑い話ではなくなってきました。2020年から順次、小学校から学習指導要領が改訂されて、学習指導要領の中に「学校図書館の活用」という文言が入りました。また、新学習指導要領では、特に国語の「読むこと」や「書くこと」が重視されています。学校司書が教科に主体的にかかわれるワークとして、「点検読書」を活用できるといいと思っています。そして、11月20日（土）には、「学校司書もGoogle認定教育者になっちゃおう！」というワークショップを行います。ギガ

スクール構想で、学校のICT化が一気に加速しました。学校図書館もその波に乗ろうという企画です。

さて、公共図書館のみなさんに、ぜひ、ご視聴いただきたいのが、11月23日（火・祝）の「YAに薦める学校司書の推し本2021～公共図書館ともコラボしちゃおう！」です。

中・高校生に本を薦めたいけれど、どんな本を紹介したらいいかわからない、学校図書館とコラボレーションしたいと思っている公共図書館のみなさん、ぜひご参加ください。前半は、三重県立津高校の井戸本吉紀さん、宮城県松山高校の大場真紀さんに実践報告をいただき、後半は「神奈川学校図書館員大賞（KO本大賞）」「京都・中高校生におすすめする司書のイチオシ本」「岡山で一れ一ぶつくす」「埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本」の実行委員

のみなさんご出演いただき、それぞれの取り組みについて紹介させていただきます。うちの地域ではこんなことをやっています、という情報提供もお待ちしております。くわしくは、図書館総合展のホームページから、「みちねこ」で検索してください。（→QRコードからも入れます）

学校司書は一人職場なので、他校との情報交換が大切ですが、コロナ禍で官製の研修が開催されないという話も聞きます。また、非正規の学校司書は学びたいと思っても研修の機会がなく、学ぶ場がほしいという話も聞きます。オンラインが普及し、パソコンやスマートフォンなどの機器と、やる気があれば、研修に参加できる時代がやってきました。このチャンスを生かし、いまだからこそ、役に立つ内容を盛り込んでいます。地域の学校司書さんにご紹介いただくとともに、ぜひ、公共図書館のみなさまもお気軽にご参加ください。

（きのした みちこ：埼玉県立浦和第一女子高校司書）



## 神部 京

人は自分が感じていること、考えていることをコミュニケーションを通して相手に伝える。もし、その手段が限られた方法、または十分に伝わらないとしたらどれほどの疎外感を感じるのだろうか。自分の考えを伝えることが困難な場合、人や世界とどのように繋がるのが出来るのだろうか。作品を通して見ていきたい。

『ピーティ』（ベン・マイケルセン作 / 千葉茂樹訳 / ずずき出版 / 2010）

「コービンさん、ほんとうにざんねんですが、あなたのお子さんは障害を持って生まれてきました」ピーティ・ロイ・コービンが生まれた時、母親は医師からそう伝えられた。ピーティは脳性麻痺と重度の知的障害であると診断された。両親は献身的に面倒をみたが、ピーティが生まれてから2年後、精神病患者収容施設へ預けることになった。ピーティはジェスチャーを交えコミュニケーションを試みる。ピーティに関心を持った職員や友人は彼が示す動作をもとに親交を深めた。その後ピーティが50歳を越えた頃、州の近代化政策の一環として介護ホームで生活することとなった。介護ホームでの暮らしが10年以上たったある日、ピーティはトレバーという少年と出会う。トレバーの両親は家庭を顧みない生活を送っていた。トレバーにとって血の繋がった両親よりも、ピーティの方が家族と呼べる存在となっていた。どんな境遇でも人生を楽しみ、感謝し、人のことを思いやったピーティは人を癒やし、励ます一生を送った。

次の3作は、脳性麻痺と診断された主人公のありのままの日常が映し出されている作品。

『きよぼうきょうはいいてんき』（白石清治文 / 西村繁男絵 / 福音館書店 / 2005）

作者が過ごした子ども時代の話。身体は思うように動かせないが、同年代の近所の子もたちと遊んだり、身近な自然に触れ合う姿が描かれている。

『車いすのマティアス』（トーマス・ペリイマン写真・文 / 偕成社 / 1990）

6歳になるマティアスは運動障害と耳が聞こえない状況の中で、健康な子どもであれば簡単にできることもたくさんの時間をかけ訓練し、身につけて行く。手話を習ったり、パソコンを使って勉強をしたり。写真から発信される彼の表情からは子どもらしい真剣さや好奇心、笑顔が見られる。

『ぼくたちのコンニャク先生』（星川ひろ子写真・文 / 1996）

保育園に勤める近藤先生、通称コンニャク先生は食事をこぼしたり、話も苦手。でも、子どもたちと視線を合わせ真剣に関わり、子どもたちから愛される。上手く機能しない身体のことを、病気ではなく怪我をしてしまったのだと子どもたちに話し、特別さを感じさせない。

『わたしの心のなか』（シャロン・M・ドレイパー作 / 横山和江訳 / ずずき出版 / 2014）

この作品は主人公の心情で語られてゆく。メロディはもうすぐ11歳になる小学5年生の女の子。生まれつき脳性麻痺によって、歩くこと、話すことが出来ない。でも、身体が不自由なだけであって、考えることや、言葉を吸収すること、様々な感情は他の子と変わらない。メロディは特別支援学級に在籍しながら、5年生になるとインクルージョンクラスでも学ぶようになった。メロディは自分のパソコン（携帯用会話補助装置）を手に入れ、この機器を使うことでコミュニケーションを楽しむことが出来るようになった。同年代の子どもたちとの関わりの中で、様々な気持ちの葛藤も描かれている。支えてくれる人々を感じつつ、メロディは成長していく。

それぞれの作品において時代背景は異なり、脳性麻痺に対する理解や支援方法も一律ではない。技術の進歩により、道具を活用したコミュニケーションの手段は人と世界を繋ぐ一助となっている。しかし、どのような場合においてもコミュニケーションにとって不可欠なのは、まずありのままの存在を認め合うことであると作品を通して感じた。

（かんべ みやこ）

# 鳥の目 86

## —— 島と大海原に生きる海鳥 ——

為貞 貞人

海洋は地球表面のおよそ71%を占め、そこに生息する海鳥類はアホウドリ、アジサシ、カツオドリ、カモメ、ミズナギドリなど約360種で、鳥類全体のわずか3%です。その海鳥の中にはカモメなど海岸線の近くで生息する沿岸性の鳥もいますが、陸地から遠く離れた海と空が果てしなく続く外洋域を放浪する鳥もいます。アホウドリ類はその中で最も優れた飛翔力をもつ鳥です。

その生活圏は私たち人間の目にめったに触れない世界であり、普通アホウドリの生活に私たちに関心をもつことはありませんが、最近そこでも人間活動の影響が強く現れ始めています。

### 苦境に立つ海鳥類

伊豆諸島の鳥島など南海の孤島で絶滅したアホウドリの復活・調査・保全の第一線で活動されてきた長谷川博さん（現・東邦大学名誉教授）の近著『アホウドリからオキノタユウへ』（新日本出版社／2020年）によると、世界の絶滅のおそれのある海鳥類は約110種にのぼり、海鳥類全体の30%で、さらにそれに準ずる状況にある海鳥類35種を合わせると、海鳥のじつに4割近くが苦境に追いやられています。

このように海鳥類は鳥類の中でも最も絶滅のおそれがあるグループです。しかも海鳥類の中でも沿岸性のグループは15%が絶滅の危機にあるのに対し、大海原を広く移動する外洋性の海鳥は39%、中でもアホウドリ類は22種（種の再統合で21種とも）のうち15種、じつに68%が絶滅の危機にあるといわれます。

なお長谷川さんは「アホウドリ」の和名を近著では敬愛の念をこめて「オキノタユウ」の名称で呼ばれており、私も賛成ですが、一般の文献との関係でここでは「アホウドリ」を使います。

アホウドリのような人間の生活空間から遠く離れた島々で繁殖し、大海原を広く放浪する外洋性の鳥の方が一層危機的な状況にあるということは

どういふことなのでしょう。それも外洋性の海鳥の中でも特に優れた飛翔能力をもつアホウドリ類が最も厳しい状況の追い込まれているのです。

### 尖閣諸島のアホウドリ

20世紀初め鳥島のアホウドリが人間の手で絶滅したのに続き、東シナ海に浮かぶ尖閣諸島のアホウドリも絶滅の悲劇に見舞われました。現在、尖閣諸島は領海への中国船の頻繁な侵入で注目されていますが、ようやく繁殖を回復した島のアホウドリの目にはどんな光景に見えるでしょう。

1885年（明治18）に魚釣島外2島の無人島への国標建設の儀が、その時点では「目下建設を要せざる」と政府により却下されましたが、10年後の1895年1月、日清戦争の勝利が明らかになった段階で「久場島、魚釣島と称する無人島」を沖縄県の所轄として標杭の建設が閣議決定されたことは、この島々のアホウドリの運命を大きく変えました。

19世紀まで尖閣諸島や台湾海峡の澎湖群島、台湾北東沖の彭佳嶼、棉花嶼などの小島でアホウドリが大集団で繁殖していました。無人島の尖閣諸島は1885年10月、石澤兵吾が調査し、魚釣島で数万羽のアホウドリの営巣を確認、また1891年と93年には実業家の古賀辰四郎の命を受けて伊澤弥喜太が尖閣諸島を探検し、その調査結果から尖閣諸島の開拓を計画しましたが、日本政府は尖閣諸島の帰属が未定のため開拓の許可を見送っていました。1895年4月に日清講和条約が締結された翌年の1896年、古賀は沖縄県から許可を得て尖閣諸島でアホウドリの羽毛採取の事業を開始し、同年沖縄の郡制施行により尖閣諸島が八重山郡に編入され、国有地に指定されると、同年9月政府は古賀に魚釣島、久場島、北小島および南小島を30年間無償で貸与し、無償貸与終了後は1年契約の有償貸与になりました。

古賀は1897年から魚釣島、98年に久場島に人びとを送り込み、集落を作ってアホウドリの羽毛

採取（撲殺による）やアジサシ類の剥製の製作、鳥油の採取などの事業を行いました。これによりアホウドリは毎年15～16万羽が捕獲され、その個体数は急激に減少し、11年間に約105万羽が捕獲されたといわれます。

1939年（昭和14）5月下旬から6月上旬、農林省の資源調査隊が魚釣島や南小島、北小島、久場島を上陸調査しましたがアホウドリは1羽も見つけることが出来ませんでした。戦後、アメリカ軍の試射爆場になった久場島を除く3島を1950年と1952年に琉球大学が調査し、その後1963年にも調査しましたが、いずれもアホウドリは観察できず、尖閣諸島から絶滅したと考えられました。

尖閣諸島でアホウドリが再発見されたのは、鳥島で再発見された1951年から20年後の1971年4月1日で、琉球大学調査団の池原貞夫教授が南小島の断崖絶壁の狭い岩棚で観察した12羽でした。その後の調査では長く繁殖は観察されなかったが、1988年4月長谷川さんは朝日新聞社の小型ジェット機から南小島の狭い岩棚で数羽のひなを確認しました。その後も1991年、1992年の調査で南小島では10羽以上のひなと成鳥が観察され、繁殖が確認されました。

しかし、その営巣地は140mを超す高い断崖絶壁にあり、鳥の着陸には岩に激突する危険がある場所で、直下には事故死と見られる白骨がいくつも散らばっていたそうです。なぜアホウドリはそうした危険な場所を営巣地に選ぶのか、長谷川さんは鳥たちが人間をおそれて、「絶対に安全な場所」を探したためであろうと推定します。

というのも1960年代まで尖閣諸島には台湾から漁民がひんぱんに訪れ、急峻な崖のアホウドリの巣の卵を採集して食材にしていたようです。こうした中でも南小島の繁殖集団は少しずつ増加したと判断されますが、領土問題の再燃で、2004年に尖閣諸島への上陸は禁止され、調査・観察は一切できなくなったままです。

## 大海原のアホウドリ

世界のアホウドリ類は、北大西洋を除き寒帯か

ら亜熱帯まで広く生息し、北半球では北太平洋にキタアホウドリ属のアホウドリ、コアホウドリ、クロアシアホウドリ、ガラバゴスアホウドリの4種が生息しています。

アホウドリは19世紀末まで鳥島や小笠原諸島の<sup>むこじま</sup>賀島列島・西之島、大東諸島、尖閣諸島、台湾周辺の小島に大きなコロニーをつくり、伊豆・小笠原諸島の近海や本州の太平洋沖、台湾海峡から東シナ海、黄海、南西諸島近海、さらに対馬海峡を越えて日本海に入って採食していました。

繁殖を終えたアホウドリは単独で飛び立ち、5月には日本列島、カムチャッカ半島に沿って北上し、オホーツク海、ベーリング海、アラスカ湾に渡り、6月から9月まで過ごします。夏、北極圏の海は植物プランクトン、さらに動物プランクトンが爆発的に繁殖し、イカ類や魚類の宝庫になり、多くの海鳥や海生哺乳類が集まり、アホウドリはこの海域を放浪します。

しかし、アホウドリは繁殖する島々での捕獲で個体数が激減し、外洋域では、特に多く見られたアラスカ半島の南のアラスカ湾の海域では1920年代にはほとんど見られなくなりました。そして1940年代にはアホウドリは絶滅の瀬戸際に追い込まれ、その海洋分布域を急速に狭めました。

戦後1951年1月、鳥島で少数の生存が再発見されてからでも、1975年から1982年にかけてのアラスカ沖での大規模な調査では、わずか1羽が観察されただけでしたが、保護活動により個体数が増加、アホウドリの海洋分布域が少しずつ回復してきました。

長谷川さんによると、1990年代後半になると、8月にオホーツク海でしばしば観察されるようになり、2000年代には鳥島の集団が1000羽を超えた結果、伊豆諸島北部海域や房総半島から東北地方の沖で観察される例が増え、2005年の7、8月にはオホーツク海で成鳥や若鳥が見られたそうです。さらに鳥島集団の個体数が3000羽を超えた2010年代にはオホーツク海でアホウドリの小さな群れが観察されるようになりました。こうして2012年8月にはベーリング海峡を越えたチュコト

海で約 70 年ぶりに若いアホウドリが観察されました。

しかし一方、1970 年代後半での船からの廃油投棄、1980 年代からは大量のプラスチック類の浮遊ごみが海洋への流出し、海鳥類に大きな災難を与えてきました。また 1990 年後半からベーリング海などの海域でタラやオヒョウなどはえはわ漁によるアホウドリの事故死が急増し、世界中の海洋でアホウドリ類やミズナギドリ類のはえなわ漁業による混獲が問題になりました。

南大西洋のサウスジョージア島で繁殖し、南大西洋の周極を放浪するハイガシラアホウドリは過去 90 年間に約 40% 減少した絶滅危惧種ですが、

2018 年の研究ではジオロケーター装着の 16 羽の巣立った鳥の大半が日本の主な漁場に直行したといます。(『世界の渡り鳥大図鑑』(Mike Unwin 著/森本元監訳/緑書房/2021 年))

1970 年代に南半球でアホウドリ類が多く日本のミナミマグロのはえなわ漁業の犠牲になり、南極海の島ではその繁殖数が減少しましたが、現在でもそのような混獲事故はあるのでしょうか。

今日、地球温暖化で海の水位が上がり、低いサング礁の島の海鳥の巣が水没するおそれや海水温の上昇による魚類などの減少や異変で、大海原を生きる海鳥の前途が益々暗くなっています。

(ためさだ さだと さいたま市図書館友の会)